

乳児の心を見いだすこととその発達の帰結

—Mind-mindedness研究の概観と展望—

教育心理学コース 小山 悠 里

Parental proclivity to find out infant's mind and its developmental outcomes

—Review of literature and future direction of mind-mindedness research—

Yuri KOYAMA

Mind-mindedness is defined as parental proclivity to treat their infants as individual who have mind. However, the construct of mind-mindedness is split into two constructs: parental ability to read their infants' mind appropriately and parental proclivity to imagine their infant mind richly. The aim of this article is to review the constructs of mind-mindedness and its developmental outcomes distinguishing appropriate mind-mindedness and rich mind-mindedness. Based on the overview, future direction of mind-mindedness research will be presented.

目 次

- 1章 はじめに 赤ちゃんの心への注目と子どもの発達
- 2章 Mind-mindedness 概念
 - A 定義の変遷：適切な MM と豊かな MM
 - B MM 概念内の不一致をどのように扱うか
- 3章 乳児の心への注目の変化
 - A MM の質的な変化
 - B MM の平均値レベルでの変化
 - C MM の変化に関する今後の研究の展望
- 4章 乳児に心を見いだすことと発達の帰結
 - A アタッチメントの安定性
 - 1 適切な MM とアタッチメントの安定性
 - 2 豊富な MM とアタッチメントの安定性
 - B 心の理解の発達
 - 1 心の理論の獲得
 - a 「適切な MM」と心の理論の獲得
 - b 「豊富な MM」と心の理論の獲得
 - 2 情動の理解
- 5章 Mind-mindedness とその発達の帰結に関する研究の展望
- 引用文献

1章 はじめに 赤ちゃんの心への注目と子どもの発達

私たちは、生まれたばかりの赤ちゃんにでさえ、心を見いだし、彼らがあたかも十分に複雑な心を備えて

いるかのようにふるまってしまう。生後1～6日の新生児についての感情的特徴の描写¹⁾や乳幼児の気持ちの母親による「代弁」²⁾は、ありふれた光景ではあるが、発達研究者の関心を捉えて報告されてきた。これらの行動は、Stern (1989)³⁾が養育者は乳幼児を制御すべき生理的システムとみなす一方で、「かなりよく発達した人間」とみなすとしたことに重なるであろう。このような養育者の資質は、乳幼児を養育者にとって了解可能な存在たらしめ、また、そうすることで乳幼児がそうなるであろう発達領域に働きかけることを可能にするという発達の意義があるとされ、近年その関連が検討されてきている。乳児に心を見いだす養育者の傾向に関する諸概念をレビューしたものととして Sharp & Fornagy (2007)⁴⁾が挙げられるが、そこでは関連概念の列挙と操作的定義にもとづく整理が行われるにとどめられており、概念内での質的差異やその子どもの発達への寄与の仕方の異なりについてまでは踏み込んではいない。また、養育者が乳児に心を見いだす傾向は変化しない特性として扱われてきたが、近年変化する側面にも注目が当たっている。さらに、子どもの発達の帰結として心の理論の個人差が扱われてきたが、子どもの心の理解の発達といったときには様々なものがあると考えられる。そこで本論文では、最も多く子どもの発達との関連が検討されていると考えられる Mind-mindedness (以下 MM と表記) を中心に、養育者の乳児の心への注目に関する概念について整理を行

い、それを踏まえて子どもの発達との関連について得られている知見を整理していく。その上で、これまでの研究が抱える課題を整理し、乳児への心への注目の発達の意義に関する研究の展望をさぐることにする。

2章 Mind-mindedness概念

子どもの発達の帰結との関連で注目されている養育者のMMではあるが、構成概念に対して質の異なる操作的定義が存在し、また類似概念との弁別の困難など、その概念については多様な問題が存在する。

A 定義の変遷：適切なMMと豊かなMM

MMはMeins (1997)⁵⁾によって提唱された概念であり、子どもの発達に関わらず、「養育者が乳児を、単に満たされるべき欲求をのみ備えた存在としてではなく、意図を持って行動することができる心を持った1人の人として扱ってしまう傾性」として定義づけられる。当初のMM概念は、乳児の視点に立つという敏感性⁶⁾をもとにした概念でありながらも、「あなたのお子さんはどんなお子さんですか」という問いに対して養育者がどの程度子どもを心的描写するかという測定法によってとらえられ、「あたかも」赤ちゃんが、独立した心的世界を持つ人と扱うことによって、後の自分や他者の心的理解の発達の最近接領域に働きかけ、子どもの心の理解発達に寄与すると考えられていた。つまり、当初のMM概念は、読み取りの適切さを問題とする敏感性にもとづく概念でありながらも、実際の子どもの発達よりも上回って心を見いだしてしまうような親の傾性をとらえていたと考える。

しかし、生後1年のMMをとらえるために親子相互作用の中での養育者による乳児の内的状態への言及、特に「適切な言及」としてとらえる測定法が編み出され⁷⁾、子どものアタッチメントの個人差および子どもの誤信念課題の遂行を予測するという知見⁸⁾が提出された以降、国外での操作的定義は乳児の心への注目の適切性を問題とする敏感性よりのものが主要なものになった。もちろん、適切性を問わない測定法⁹⁾によって研究を行っているものもあるが、レビュー論文におけるMMの操作的定義でさえ適切に乳児の内的状態に言及する傾向とされており¹⁰⁾、適切性を問う測定法がより一般的となっていると思われる。実際、Meins (1999)¹¹⁾は、適切な乳児の内的状態への言及と非調律的な言及がそれぞれ異なって後の子供の心の理解の発達を予測することから、これらは異なった構

成概念であるとし、Meins (2013)¹²⁾において敏感性のよりよい代替として、適切な内的状態への言及としてのMMを挙げている。実際よりも上回って乳児に心を見いだす養育者の傾性として始まったMMは、実際の乳児の心との重なりを問う正確な読み取り能力としてとらえられるようになったといえよう。

本邦では、篠原 (2005)¹³⁾がMMの構成概念と操作的定義の不一致を指摘し、実際よりも上回って乳児の心注目する傾向を「豊かなMM」、適切に乳児の心を読み取る傾向を「適切なMM」とし、前者の「豊かなMM」に焦点をあてる必要を論じた¹⁴⁾。そこで、乳児の気質やそれまでのやりとりを統制して「豊かなMM」を測定することを目的とした測定法が開発され¹⁵⁾、子どもの他者の心の理解の発達との関連が縦断的に検討されており¹⁶⁾、本邦でのMMの認識は、やや過剰に乳児に心を見いだしてしまうような養育者の傾向というものであると考えられる。

B MM概念内の不一致をどのように扱うか

このように、MMの概念内での一致しない概念、そして国内外のずれがあるわけであるが、このような研究領域内での不一致を概念が抱える問題としてとらえ、いずれかのMMに絞るべきなのであろうか。実生活の中で養育者が乳児に心を見いだす様子を考えてみるならば、そのやり方は、「豊かに想像する」ことから「適切に読み取る」ことまで、実に多様である。その多様性が反映されて、この不一致の状況に至っていると考えるならば、概念が精緻化されていないともいえる一方で、「豊かなMM」と「適切なMM」を包括して、子どものとの発達との関連を検討していくことで、子どもの心への注目が子どもの発達の最近接領域に働きかけていく様子についてのより詳細な知見を得る可能性があると考ええる。今後、「豊かなMM」と「適切なMM」の違いを区別しながらも、それらを併せて後の子供の発達の帰結との関連を問う研究が期待されるのではなかろうか。

3章 乳児の心への注目の変化

MMは、時間的に安定した養育者の特性として考えられており、これまでそれを示す知見が蓄積されてきた¹⁷⁾¹⁸⁾。しかし、日々大きくなる子どもに対して養育者が心を見いだすやり方やその現れは当然変化するものではないかと考えられる。以下では、そのような変化を扱った研究を概観する。

A MMの質的な変化

MMは時間的な安定性をもった変化しないものともみられてきた一方で、MMを変化するものとしてとらえるものもあった。例えば、Bernier & Dozier (2003)¹⁹は、月齢の小さい子どもを、あまりにも心的な属性を用いて描写することは、養育者による「乳児の心」への注目が現実とそぐわず、そのためアタッチメントの安定性と負の相関を示したと考えている。また、篠原 (2013)²⁰は、養育者による「乳児の心」への注目は、発達早期には養育者による「想像的付与」という側面をもっていたが、子どもの意図の発達にともなって「読み取り」となり、子どもの発達にともなってかなり質の異なったものになっていく可能性を考えている。実際、Arnott & Meins (2008)²¹ではそれを示唆する結果がえられている。胎児期において父親が、どんな子になるだろうかと話そうとしたり、話したりことができることは、子どもを心的な描写をするか否かにかかわらず、月齢6か月時点における全体的な心的語彙の利用傾向と関連があるが、適切な言及と非調律的な言及のいずれとも正の相関がみられ、適切な言及と非調律的な言及の間に正の有意な相関がみられた。一方で、母親においても胎児期に全体的にどんな子になるか話すことができることは、月齢6か月時点での乳児の内的状態への言及を予測したが、父親とは異なり、適切な言及については有意な正の相関がみられ、適切な言及と非調律的な言及の間に有意な相関はみられなかった。このことから、以下2点のことが示唆される。第1に、胎児を全体的にどんな子になるか考えることがMMの先駆体としてあるのかもしれない。第2に、現代は父親の養育者としての重要性はみとめられながらも未だ母親が主たる養育者となっていることを鑑みて、子どもとやりとりをすることができる母親は、「乳児の心」への注目を、適切性を備えたものに精緻化させているのではないかと推測している。つまり、「乳児の心」への注目は子どもの発達に伴ってその表れが変化し、そのような子どもとのやりとりを通して、適切性を備えたものになっていくのかもしれない。

B MMの平均値レベルでの変化

その他MMの変化を扱う研究としては、Meins *et al.* (2011)²²が挙げられる。そこでは、2時点間の得点間の相関からとらえられるMMの時間的安定性を確認し、月齢3か月から月齢7か月にかけての「適切な言及」の割合および「非調律的な言及」の割合の増加傾向を確認した。一方で、このような増加傾向が見ら

れなかった研究もある。Kirk *et al.* (2015)²³では、13組の母子を対象とし、月齢10か月、12か月、16か月、20か月での5時点での時間的安定性を検討している。その結果、「適切な言及」については概ね時間的安定性は確認されたとしている。また、個人内の変化についてマルチレベル分析を用いて「適切な言及」について検討したところ、級内相関は $ICC = .41$ であり、分散の59%は個人内の分散によって説明されることから、潜在成長曲線モデルによって検討したが、増加傾向はみられなかった。また、150組のオーストラリアの母子を対象としたMcMahon *et al.* (2016)²⁴の研究では、月齢7か月から月齢19か月にかけての時間的安定性を検討している。「適切な言及」についてはその時間的安定性がある程度確認されたが、「非調律的な言及」については確認されなかった。月齢7か月から月齢19か月にかけての言及の増減について「適切な言及」の頻度は有意な減少傾向が見られた一方、「非調律的な言及」については有意な増加傾向が見られた。このような増減の背後に、McMahon *et al.* (2016)は、月齢が大きくなり、子どもの主張が増す中で、養育者の意図と子どもの意図がぶつかりやすくなったためではないかと考察している。

以上から、MMの平均値レベルでの変化については、どの月齢での変化を扱うかによって、結果が一致していない。この背景として、McMahon (2016)が考察しているように、子どもの発達の变化が大きく関与していることは当然考えられる。

C MMの変化に関する今後の研究の展望

上述の研究の概観から、MMは安定的な養育者が乳児に心を見いだす特性とされてきたが、そこには質的な変化や量的な変化がみられることが示唆された。MMの質的な変化を扱った研究としてArnott & Meins (2008)の興味深い研究を挙げたが、MMの質的な変化に関する研究は、これのみにとどまっており、生後の子どもの発達に伴っての質的な変化はとらえられていない。また、MMの量的な変化に関する研究は、特にここ数年で行われるようになってきたが、まだ緒にたばかりであり、一致した結果が得られてない。そのような結果の不一致の背後には、まず月齢による子どもの発達の違いが考えられ、MMは直線的に増加するというような、単純な増減ではとらえられないのかもしれない。今後は、質的な変化、量的な変化ともに研究の蓄積が求められよう。また、その際の変化は、子どもの発達との関連づけながら説明される方向性も

必要であろう。そのような研究の蓄積された末には、MMの質のみならず、変化も併せて子どもの発達の帰結との関連を問う研究が行われることが期待されると考える。つまり、いつの、どのような乳児の心への注目が、後の子どもの心の理解の発達に寄与するか明らかにするような研究である。Kirk *et al.* (2015) は、MMの変化と子どもの発達の帰結との関連を検討した数少ない研究であるが、今後はそこに、「適切なMM」や「豊富なMM」といったような質的な差異も加えていくことで、乳児の心への注目とその発達の寄与に関するより詳細で、より現実在即した知見が得られるのではないかと考える。

4章 乳児に心を見いだすことの発達の帰結

養育者が乳児に心を見いだす傾向は、どのような発達の帰結を導くのであろうか。これまで、アタッチメントの安定性と乳児の他者の心の理解の予測を中心に研究が行われてきた。しかし、上述のように乳児に心を見いだすと言っても豊かなもの、適切なもの、歪められたものと様々なものが想定され、一様に子どもの発達に寄与するとは考えにくいし、寄与するとしてもそれぞれ異なった機序で寄与する可能性もある。以下では、MMの質的な差異を考慮しつつ、これまでに得られてきた乳児に心を見いだす養育者の傾向とその発達の帰結に関する知見を概観する。

A アタッチメントの安定性

アタッチメントとは、子どもが身体的・心理的な負荷にさらされた際に、重要な他者と近接を保つことを通して、その不安定な状態を立て直すような機能をもった子どもと養育者の間の情緒的関係性のことである。アタッチメントは養育者が乳児の視点にたち、乳児のシグナルに適切にすばやく応答することができる養育者の特徴である感性性によってもっともよく説明されるとされてきた²⁵⁾。しかし、後のメタ分析²⁶⁾において感性性は唯一アタッチメントの安定性の予測因である一方で、その予測力は決して大きいということができないことが示されたことから、アタッチメント安定型の子どもの母親が見せた子どもを心的に存在ととらえる傾向が、感性性のよりよい代替となると想定され、その関連が検討されている^{27) 28)}。

1 適切なMMとアタッチメントの安定性

適切なMMに関していえば、いくつかの研究がなされ、かなり頑健に発達早期のMMが後の子供のアタ

チメントを予測するという知見が示されてきた。例えば、Meins *et al.* (2001)²⁹⁾ では、月齢6か月時点における養育者の感性性とMMの両者がどのように子どもが月齢12か月になった時のアタッチメントの安定性を予測するか検討したところ、感性性が分散の6.5%を説明するのを上回って、MMが12.7%を説明していた。同様にMMがアタッチメントを安定する知見は得られている³⁰⁾。Meins *et al.* (2012) では、従来の感性性の測度に代わって、「適切な言及」と「非調律的な言及」の掛け合わせによって、アタッチメントの安定型、不安定/回避型、不安定/抵抗型を予測できることを示した³¹⁾。このような結果を受けてMeins (2013)³²⁾ MMを感性性の概念を従来の測定よりも正確に捉えているものとしている。

一方で、Laranjo らは、MMのアタッチメントの安定性の予測が感性性を媒介していることを示す知見も提出されている^{33) 34)}。月齢12か月においてMaternal Behavior Q Sortによって測定された母親の感性性およびMMが月齢15か月時点での子どものアタッチメントの安定性（アタッチメントQソート法；以下AQSと表記）との関連を検討したところ、MMが感性性を媒介して子どものアタッチメントの安定性を予測するという関連にみられた。このような結果について、Laranjo らは、MMが感性性の前提条件になっているという感性性とアタッチメント、Mind-mindednessの関連についての想定³⁵⁾を支持するものだとしている。感性性を媒介してMMがアタッチメントを予測するのか、MMが感性性よりアタッチメントを予測する養育者の特性としてあるのか、結果が一致しないところではあるが、MMが多かれ少なかれアタッチメントを予測することは一貫して示されているのではないかと考えられる。

MMとアタッチメントの関連についてより複雑な過程を想定するものもある。Arnott & Meins (2007)³⁶⁾の予備的調査では、25組の父親-母親-乳児と3組の母親-乳児を対象に、妊娠期の養育者のアタッチメント（以下AAIと表記）と内省機能（以下RFと表記）、月齢6か月時点でのMM、月齢12か月時点での子どものアタッチメントを測定した。その結果、もともと持っている養育者の特徴（アタッチメント、RF）が生後の相互作用場面でのMMに関連する度合いが父親では強く、母親では弱かったという知見を提出している。このことから、子どものとのやりとりの中で母親は、自ら持っている特徴を修正し、子どもに合わせていくことが可能であったのではないかと解釈している。また、養育者のアタッチメントが自律型の場合、MMの

高低は子どものアタッチメントの安定性に関わらないが、自律型でなかった場合MMの高低が子どものアタッチメントの安定性に関わることを示唆する知見も提出された。敏感性とMMのいずれも子どもとのやりとりの中で発揮される養育者の特徴ではあるため、これらの知見は「MMが直接予測するのか/敏感性を媒介するのか」ということに結論づけることに資するものではないが、アタッチメントの安定性が養育者と子どものやりとりを基盤とするものであることを考慮するならば、やりとりの多寡によって養育者がもっていた特徴によって方向づけされる度合いが異なることや、養育者のもっている特徴によって、MMとアタッチメントの安定性の関連の度合いが異なることを示す知見は、MMとアタッチメントの安定性の関連について複雑でより詳細な知見をもたらしていると考えられる。

2 豊富なMMとアタッチメントの安定性

豊富なMMとアタッチメントの関連を検討する知見は多くはない。Meins *et al.* (1998)³⁷⁾ においては3歳時に自身の子どもにどの程度心的描写を行うかという観点からとらえたMMと子どものアタッチメントの測定が行われたが、安定型の子どもの母親は、不安定型の子どもの母親に比して、心的な描写を用いることが有意に多かった。このようにアタッチメントの安定性と養育者の豊富なMMの関連を示唆する知見がある一方で、それを否定する知見も存在する。Bernier & Dozier (2003)³⁸⁾ において、月齢6か月～月齢30か月の乳幼児と里親の64組を対象として、自分の子どもの表象についてたずねる面接法によって測定されたMMとアタッチメントの安定性の間には、先行研究とは一致しない負の関連が見られた。このような研究の不一致について、月齢に合った測定法でなかったため、乳幼児に対してあまりにも心的な帰属を用いて描写することは、実際の子どものからのシグナルへの調律の欠如を反映しており、そのような欠如が安定的なアタッチメントの発達を阻害しているのではないかとしている。また、Lundy (2003)³⁹⁾ は、父親-母親-乳児の24組を対象として、月齢6か月時点での相互同期性と適切性を問わない乳児の内的状態へ言及によってとらえられたMMが月齢13か月時点でのAQSによるアタッチメントをどのように予測するか検討したところ、父親と母親いずれにおいても、MMが相互同期性を媒介して子どものアタッチメントの安定性を予測していた。このように豊富なMMとアタッチメントの安定性の関連についていまだ研究数は少ないとはいえ、

豊富なMMのアタッチメントの安定性については一致した結果が得られていないのが現状である。あまりに小さな月齢の子どもにたいする心的な描写はかえって不適切なのではないかという議論や、MMがよく調整され適切な相互作用である相互同期生を媒介してアタッチメントを予測したという結果を踏まえるならば、単なる「豊かさ」ではなく、実際に子供の心と重なっている「適切さ」がアタッチメントの安定性のためには重要なかもしれない。

B 心の理解の発達

養育者が乳児の心を見いだす傾向は、養育者から心の焦点化したやり取りを引き出し、足場かけを付置させることで、かえって子ども自身が自分や他者を心的枠組みによって理解する心的機能の発達に寄与するのではないかと考えられ⁴⁰⁾、知見が蓄積されてきた⁴¹⁾。しかし、MMの質的差異を区別された上でその発達の帰結が問われてきたとはいいがたい。以下では、MMの質的差異を考慮した上で子どもの心の理解の発達の予測を扱った研究を概観する。

1 心の理論の獲得

a 「適切なMM」と心の理論の獲得

Meins *et al.* (2002)⁴²⁾ は、月齢6か月時点のMM、養育者の敏感性、月齢12か月時点での子どものアタッチメントを測定し、月齢45か月および月齢48か月時点での誤信念課題の子どもの遂行を検討したところ、月齢6か月時点での適切な乳児の内的状態への言及が、その後の心の理論課題の遂行を、認知的能力を統制してもっとも予測した。類似の結果はそのほかの研究でも得られており、象徴遊びや共同注意など早期の他者の心の理解の表れとの関連も検討されてきている⁴³⁾⁴⁴⁾⁴⁵⁾⁴⁶⁾。このようにおおむね適切なMMが後の子供の心の理論課題遂行を予測することを示唆されているが、一方でEreky-Stevens (2008)⁴⁷⁾ においては、月齢10か月でのMMは、後の子供の心の理論課題の遂行を予想せず、月齢10か月に於いて行動レベルで現れる乳児の内的状態への敏感性が予測していた。適切な言及としてのMMと行動レベルの乳児の内的状態への敏感性は関連がみられたため、今後は、知見を蓄積していくとともに、適切なMMが言語によるのか行動レベルによるのかも併せて、何が子どもの心の理解の発達に寄与するのか併せて明らかにする必要があるのではないかと考えられる。

b 「豊富なMM」と心の理論の獲得

豊富なMMの子どもの心の理論課題遂行の予測に

関する知見は、それを支持するものと支持しないものがあり、一致した結果が得られていないのが現状である。豊富なMMが線形で後の子供の心の理論化遂行を予測することを示唆する知見として、Meins *et al.* (1998) と Lundy (2013) が挙げられる。Meins *et al.* (1998)⁴⁸⁾ は、3歳時点での子どもを心的に描写する傾向としてのMMおよびアタッチメントの安定性、5歳時点で心の理論課題の遂行の関連を検討したところ、誤信念課題通過群の養育者は、非通過群の養育者に比較して、有意に心的な属性を用いて自身の子どもを描写する傾向がみられた。また、Lundy (2013)⁴⁹⁾ においても4歳時点における養育者による子どもの心的描写がなされる傾向としてのMMと養育者の相互作用時の調律行動、そして子どもの誤信念課題の遂行関連を父親、母親にそれぞれで検討したが、母親、父親いずれにおいても心的な描写を用いる傾向と子どもの誤信念課題の遂行の間には正の中程度の相関がみられ、それは調律行動に媒介されていた。

一方でMeins *et al.* (2003) および篠原 (2011) においては、上記の研究と一致しない結果が得られている。Meins *et al.* (2003)⁵⁰⁾ では、月齢6か月時点における内的状態への言及としてのMM、月齢48か月時点での子どもについて母親が心的な描写を用いる傾向、月齢45か月と月齢48か月時点において誤信念課題、月齢55か月においてSoC課題について測定し、関連の検討をおこなったが、母親が心的な描写を用いる傾向と子どもの他者の心の理解の発達との間に有意な相関は見られなかった。ただし、養育者の心的な描写の用いやすさは月齢6か月時点での乳児の内的状態への言及は「適切な言及」については有意な中程度の相関、「非調律的な言及」については中程度の有意な相関がみられている。また篠原 (2011)⁵¹⁾ においても月齢6か月時点で養育者がビデオの乳児の行動について心的帰属を行う傾向が中程度の時に、最も4歳時点での子どもの誤信念課題の遂行を予測したという結果が得られている。ただし、ここでも月齢6か月時点での乳児の行動に対する心的な帰属のしやすさは、月齢6か月時点での自由遊び場面での乳児の内的状態への言及のしやすさと有意に相関していた。篠原⁵²⁾ は、このような結果の食い違いについて適切なMMと豊富なMMの異なりを取り上げ、豊富なMMは適切な読み取りだけでなく過剰な読み取りを含んでおり、他者の見えない心を理解するためには、心への注目の豊富さ以上にその適切さが重要となるのかもしれないと述べている。実際、適切なMMに関しては、線形での子供の心の

理解の発達の予測を支持するものが多く、豊富なMMにおいては一致した結果は得られてなかった。また、豊富なMMが相互作用の調律を媒介して心の理論課題の遂行を予測していたことから、MMが子どもの心の理解の発達を予測するためには、その適切性を問わなければならないのかもしれない。逆に、Meins *et al.* (2003) において、MMと子どもの心の理論課題遂行の間に関連が見られたのは、MMが比較的高い年齢で測定されており、養育者が子供に心を見いだそうとする傾向と実際に適切に心を見いだし読み取る傾向は、それまでの経験や子どもの意図の明確化の中で、十分に重なるものとなったのではないだろうか。そのことを考慮するならば、子どもの心の理解の発達への養育者による乳児の心への注目の寄与を検討する際には、その適切性だけでなく、どのタイミングの適切さ/豊富さなのかもまた問われる必要があるだろう。

2 情動の理解

子どもの情動理解の発達についてもわずかながら研究が行われている。適切なMMに関しては、Ereky-Stevens (2008)⁵³⁾ が心の理論課題だけでなく、情動理解課題⁵⁴⁾ を行い関連の検討をしたところ、情動理解と乳児の内的状態への適切な言及としてのMMとの間に有意な関連はみられなかったが、行動レベルでの乳児の内的状態への敏感性と有意で小さい相関がみられた。しかし、階層的ロジスティック回帰分析をおこなったところ、内的状態への言及、行動レベルでの内的状態への敏感性のいずれも情動理解を予測しなかった。篠原 (2011)⁵⁵⁾ は、自分の子でない乳児のビデオ刺激にどの程度心を読み取るかによって測定する豊富なMMが後の子どもの情動理解を予測するか検討したところ、4歳時点での表情ラベリングを予測し、4歳時点での感情推測課題および表情認識課題、感情理解課題の合計いずれも予測しなかった。そこで、母親のMMが相互作用での適切性を問わない乳児の内的状態への言及量を媒介して4歳時点での表情ラベリングを説明するかを検討したところ、母親のMMから表情ラベリングへの直接のパスは有意でなかったが、相互作用の中で内的状態への言及を媒介して予測することが示された。

MMの情動理解の発達の予測については一致した結果が得られていないが、その知見はまだまだわずかであり、今後の知見の蓄積が期待される場所である。また、子どもの心の理論の獲得への寄与や情動理解の発達はいずれも「他者の」のものを扱っており、自分自身の情動の理解へのMMの寄与は十分に扱われてい

ないのが現状である。しかし、低いSES群においては、MMと問題行動が関連していたという知見⁵⁶⁾やMMとアレキシサイミアの関連を示唆する知見⁵⁷⁾を鑑みるならば、MMと自己の情動の理解や情動の制御との関連は、今まで以上に検討されてもよいのかもしれない。さらに、情動理解についてアタッチメントと心的会話はどちらが情動理解を予測し、どのような過程があるのか理論的想定はされるものの、実際の研究では明らかでないという議論がある⁵⁸⁾。養育者の乳児の心への注目、そして関係性のそれぞれがどのように後の子供の情動の理解を助けるのか、MMとアタッチメントという観点から明らかにする意義は大きいと考えられる。

5章 Mind-mindednessとその発達の帰結に関する研究の展望

本論文では、養育者が乳児に心を見いだす傾向であるMind-mindednessを中心に、概念と子どもの発達の帰結との関連について概観してするなかで、今後の研究の展望をさぐった。今現在MMは、乳児の心を実際よりも上回って想定するような「豊富なMM」と適切に乳児の心を読み取る「適切なMM」という質の異なる概念によってとらえられてきている。それらを区別して扱っていくことは肝要ではあるが、2つのMMを併せて子どもの発達との関連を問うていくことで、より詳細な過程に関する知見が得られると考える。また、特性として扱われてきたMMであったが、質的に変化することや量的にも変化があることが示唆されてきている。今後はそのような変化も含めて、いつのどのようなMMが子どもの発達を予測するか検討する必要があるだろう。MMの発達の帰結として、アタッチメントの安定性と子どもの心の理解の発達を扱ったが、おおむね適切なMMが豊富なMMと比して子どもの発達の予測がよいことが示唆された。いずれにせよ、適切なMMと豊富なMMを併せて、さらにその変化も考慮に入れて子どもの発達との関連を検討したものは見当たらない。今後はそのようなMMの質と変化を考慮して子どもの発達の決との関連が明らかにされることが期待される。最後に、子どもの心の理解といったときに、これまでは他者の心の理解が中心として扱われ、自分の心を扱う向きは少なかった。しかし、自身の情動の理解の発達の意義は子どもの適応上重要であり、今後MMとの関連が明らかにする必要があるだろう。

引用文献

- 1) 前原邦江 (2007). 産褥早期の授乳場面における母親の発話. 千葉大学看護学部紀要, 29, 15-20.
- 2) 岡本依子・菅野幸恵・川田学・亀井美弥子・東海林麗香・八木下 (川田) 暁子・高橋千枝・青木弥生・石川あゆち (2014). 前言語期の親子コミュニケーションにみられる代弁. 湘北紀要 (35) 67-84.
- 3) Stern, D.N. (1989). 神庭靖子・神庭重信 (訳) 乳児の対人世界理論編 (The interpersonal world of the infant) 岩崎学術出版
- 4) Sharp, C. & Fornagy, P. (2007). The parent's capacity to treat the child as a psychological agent: Constructs, measures and implication for developmental psychopathology. *Social Development*, 17 (3), 737-754.
- 5) Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex: Psychology Press.
- 6) Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M., & Stayton, D. J. (1971) Individual differences in strange-situation behavior of one-year-olds. In H. R. Schaffer (Ed.) *The origins of human social relations*. London and New York: Academic Press. pp. 17-58.
- 7) Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E. & Turckey, M., (2001). Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on infants' mental process predict security of attachment at 12months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 42(5), 637-648.
- 8) Meins, E., Fernyhough, C., Russel, J., & Clark-Cater, D. (1998). Security of attachment as a predictor of symbolic play and mentalising abilities: a longitudinal study. *Social Development*, 7 (1), 1-24.
- 9) Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Gupta, M. D., Fradley, E., & Tuckey, M. (2002). Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, 73(1), 1715-1726.
- 10) 4) に同じ
- 11) Meins, E. (1999). Sensitivity, security and internal working models: bridging the transmission gap. *Attachment and Human Development*, 1 (3), 325-342.
- 12) Meins, E. (2013). Sensitive attunement to infants' internal states: operationalizing the construct of mind-mindedness. *Attachment and Human Development*, 13, 524-544.
- 13) 篠原郁子 (2005). 子どもの心的理解を支えるものとは: 養育者の感性及び Mind-mindednessの役割, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 5, 357-370.
- 14) 篠原郁子 (2013). 心を紡ぐ心-親による乳児の心の想像と心を理解する子どもの発達, ナカニシヤ出版
- 15) 篠原郁子 (2006). 乳児を持つ母親におけるmind-mindedness測定法の開発 母子相互作用との関連を含めて. *心理学研究* 77(3) 244-252.
- 16) 篠原郁子 (2011). 母親のmind-mindednessと子どもの信念・感情理解の発達: 生後5年間の縦断的調査. *発達心理学研究*, 22(3), 240-250.
- 17) Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Gupta, M. D., Fradley, E., & Tuckey, M. (2003). Pathway to understanding mind: Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*, 74(4), 1194-1211.

- 18) Meins, E., Fernuhough, C., & Harris-Waller, J. (2014). Is mind-mindedness trait-like or a quality of close relationships? Evidence from descriptions of significant others, famous people, and works of art. *Cognition*, 130, 417-427.
- 19) Bernier, A. & Dozier, M. (2003). Bridging the attachment transmission gap: The role of maternal mind-mindedness. *International Journal of Behavioral Development*, 27(4), 355-365.
- 20) 14)に同じ
- 21) Arnott, B. & Meins, E. (2008). Continuity in mind-mindedness from pregnancy to the first year of life. *Infant Behavior & Development*, 31, 647-654.
- 22) Meins, E., Fernuhough, C., Arnott, B., Turner, M., & Leekam, S.R. (2011). Mother-versus infant-centered correlates of maternal mind-mindedness in the first year of life. *Infancy*, 16(2), 137-165.
- 23) Kirk, E., Pine, K., Wheatley, L., Howlett, N., Schulz, J., & Fletcher, B. C. (2015). A longitudinal investigation of relationship between maternal mind-mindedness and theory of mind. *British Journal of Developmental Psychology*, 33, 434-445.
- 24) McMahon, C., Camberis, A., Berry, S., & Gibson, F. (2016). Maternal mind-mindedness: relations with maternal-fetal attachment and stability in the first two years of life: Findings from an Australian prospective study. *Infant Mental Health Journal*, 37(1), 17-28.
- 25) Bowlby (1969/1982). *Attachment and loss: Vol 1. Attachment*. New York: Basic.
- 26) De Wolf, M S., & van Ijzendoorn, M. H. (1997). Sensitivity and attachment: A meta-analysis on parental antecedents of infant attachment. *Child Development*, 68, 571-591.
- 27) 12) に同じ
- 28) 7) に同じ
- 29) 7) に同じ
- 30) 9) に同じ
- 31) Meins, E., Fernyhough, C., Rosnay, M., Arnott, B., Leekam, S.R., & Turner, M. (2012). Mind-mindedness as a multidimensional construct: appropriate and nonattuned mind-related comments independently predict infant-mother attachment in a socially diverse sample. *Infancy*, 17(4), 393-415.
- 32) 12) に同じ
- 33) Laranjo, J., & Bernier, A., & Meins, E. (2008). Association between maternal mind-mindedness and infant attachment security: investigating the mediating role of maternal sensitivity. *Infant Behavior and Development*, 31, 688-695.
- 34) Laranjo, J., Benier, A., Meins, E., & Carlson, S. M. (2010). Early manifestations of children's theory of mind: The roles of maternal mind-mindedness and infant security of attachment. *Infancy*, 15(3), 300-323.
- 35) 11) に同じ
- 36) Arnott, B. & Meins, E. (2007). Links among antenatal attachment representations, postnatal mind-mindedness, and infant attachment security: a preliminary study of mothers and fathers. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 17(2), 132-149.
- 37) 8) に同じ
- 38) 19) に同じ
- 39) Lundy, B. L. (2003). Father- and Mother-infant face to face interactions: differences in mind-related comments and infant attachment? *Infant Behavior and Development*, 26, 200-212.
- 40) 5) に同じ
- 41) 8) に同じ
- 42) 9) に同じ
- 43) 17) に同じ
- 44) 34) に同じ
- 45) 12) に同じ
- 46) 23) に同じ
- 47) Eleky-Stevens, K. (2008). Association between mothers' sensitivity to their infants' internal states and children's later understanding of mind and emotion. *Infant and Child Development*, 17, 527-543.
- 48) 8) に同じ
- 49) 39) に同じ
- 50) 17) に同じ
- 51) 16) に同じ
- 52) 14) に同じ
- 53) 47) に同じ
- 54) Denham, S. A. (1986). Social cognition, pro-social behavior, and emotion in preschoolers' contextual validation. *Child Development*, 57, 194-201.
- 55) 16) に同じ
- 56) Meins, E. Harris-Waller, J., & Lloyd, A. (2008). Understanding alexithymia: Associations with peer attachment style and mind-mindedness. *Personality and Individual Differences*, 45, 146-152.
- 57) Meins, E., Centifanti, L. C. M., Fernuhough, C. & Fishburn, S. (2013). Maternal mind-mindedness and children's behavioral difficulties: mitigation of the impact of low socioeconomic status. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 41, 543-553.
- 58) Harris, P. (1999). Individual differences in understanding emotion: the role of attachment status and psychological discourse. *Attachment and Human Development*, 1 (3), 307-324.

(指導教員 遠藤利彦教授)